

栄光

説教

『救いの道』

マタイによる福音書1章18節～25節

聖学院中学校高等学校教諭 久保哲哉

説教・「救いの道」	久保哲哉教師…1
特集・心を熱くする	スポーツ……………2
追悼・	高橋洋子姉……4
説教・「[会う]	新井美穂牧師…5
説教・	「主にある兄弟姉妹」
岸俊彦牧師……6	
二十歳の祝式……7	
長老のファイル……7	
牧師の書斎から……8	

興味深いのは、マタイが主イエスの系図を記した後、イエス誕生の最初の場面として父ヨセフの苦悩から描いていることです。おそらくマリアは「あなたは身ごもつて男の子を産む」(ルカ1:31)、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを覆う。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」(同35)とのお告げのことで、正直にヨセフに伝えたのでしよう。身に覚えのないヨセフは、このマリアの言葉をどう受け取ったのでしようか。使徒パウロはガラテヤ書において、聖霊の働きとして「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実」(ガラテヤ5:22)を挙げ、これとは逆に、罪の結果の第一のものとして「淫行」(同5:19)を挙げています。ヨセフから

見たマリアは、聖霊の働きを口にしたがら主なる神とヨセフに対して不義を働き、これを正当化しているように映ったことでしょう。そこでヨセフは人生における重大な二つの選択を迫られました。第一の選択はマリアの姦淫の罪を「表沙汰に」(マタイ1:19)して告発することです。この場合、マリアは石打ちの刑に処されますが、一度愛した女性がこのような死を遂げることを良しとしなかったのでしょう。ヨセフは第二の道として「ひそかに離縁しよう」と決心(同19)しました。律法上の手続きとして二人の証人を据えた上で離縁状を渡せば妻と縁を切ることは可能(申命記19:15、24:1を参照)でした。これがマリアの命を守る唯一の道なのだと考えた

のです。しかし、当時は女性が一人で赤子を育てることができた時代ではありません。やもめは孤児や寄留者と並んで救済すべき存在でしたが、姦淫の結果として夫に離縁されたという噂が広まっていたとしたらどうなのでしょう。マリアの生涯は、つらいものとなったであろうと想像します。

ここでヨセフは人間の知恵の限界に直面しています。皆さんがこのような八方塞がりの状況に陥ったときには、何に救いを求めるでしょうか。正しい人ヨセフはおそらく、熱心に祈り、神の言葉に救いを求めたのだと想像します。ヨセフが疲れ果て、眠りに落ちたそのときです。夢に天使が現れ「恐れずマリアを妻に迎えなさい。マリアに宿った子は聖霊の働きによるのである」(マタイ1:20)と、マリアの言葉が真実であることが告げられました。さらに「その名はインマヌエルと呼ばれる」(同1:23)ということ。さらにこの名は「神は私たちと共におられる」という意味であることが示されました。この紀元前8世紀後半にイザヤが語った預言を自分事として

捉えたときに、ヨセフは「神が共におられる」との信仰に立ち、神の言葉に従うことによって、マリアを家族として迎え入れるという、神を愛し、隣人を自分のように愛するという、人間の知恵では到達不可能な第三の道を選び取ることとなるのです。

創世記の時代、イスラエルと呼ばれたヤコブの息子で、夢を解く賜物を持つヨセフが奴隷としてエジプトに売り渡されたとき、様々な試練に直面する中にあつても「主がヨセフと共におられたから」(創世記39:23)、善なる道へと順調に導かれました。また、イスラエルの民を約束の地に導いたモーセの召命の場面においても神は「私はあなたと共にいる」(出エジプト3:12)と語りました。どんなに困難な試練のただ中にあつたとしても「神が共におられる」のです。から思い煩う必要はないのです。長い人生ですから、失敗や判断を誤ることもありますが、神は全てを益に変えてくださるお方です。創世記の時代から、現在まで貫かれていく神の愛と祝福を信じて生きる、救いの道がここにあります。

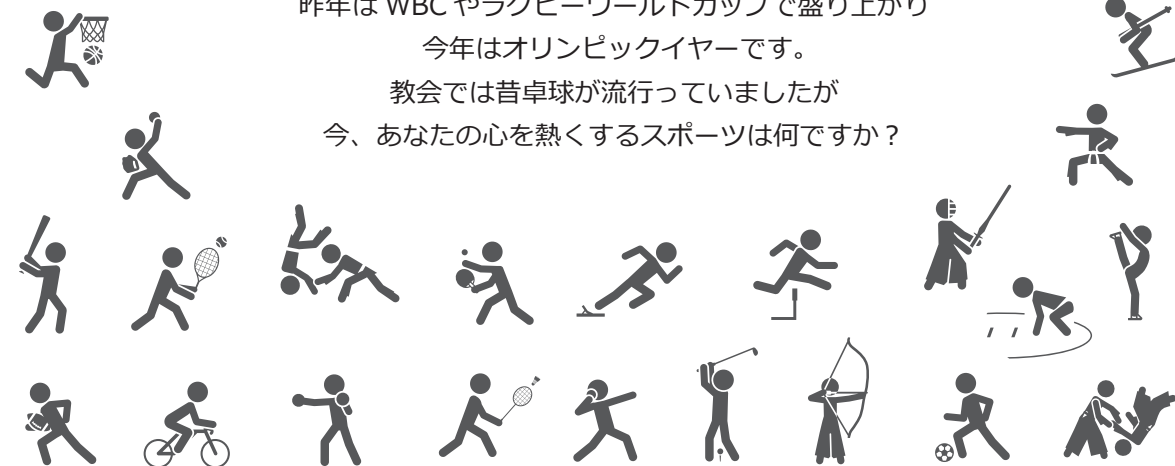
心を熱くするスポーツ

昨年はWBCやラグビーワールドカップで盛り上がり

今年はオリンピックイヤーです。

教会では昔卓球が流行っていましたが

今、あなたの心を熱くするスポーツは何ですか？



病いとの1年間

濃 芳人

少し今回のテーマから外れますが、近況でも良いとのことでしたのでご容赦ください。昨年は、スポーツの観戦どころではなく、病いとの戦いに明け暮れました。

正月早々のコロナ感染から回復後、4月の検査入院で初期レベルの前立腺癌が見つかりました。ある程度の知識があり、あまり動揺はしませんでした。しかし、検査後に喘息発作と発熱が数ヶ月間続き、とてもしんどかったのですが、医者は「検査方法に問題はないので様子を見ましょう」と言うだけでした。そのため、喘息と発熱が悪化する度に休暇を取り、別の病院で点滴治療を受けました。回復する兆しがなかったため、数日間にもわたる様々な検査を受けました。

やがて前立腺の炎症が発熱の主原因と判明し、ようやく体調が落ち着いて癌の摘出手術が可能にな

り、11月になって10日間入院しました。

病室は窓際で眺めが良く、翌朝の手術までリラックスできましたが、過去や未来、そして死の可能性も想像しました。私なりに良く生かされてきたことを感謝し、ただ主にお任せしようと思いました。

約3時間の手術の後、気がつくとは体中には管が通され、別の病室に寝かされていました。寝返りもできず全く動かせませんでした。少しずつでも体を動かすことを心がけ、手術翌日の夜には看護師の付き添いで歩けるようになりました。元の病室へ戻されてからも、毎日フロア内を散歩しました。連携の良いチーム医療に助けられ、順調に回復しました。入院中、病院から借りた2冊の癌に関する本も読み、癌との向き合い方を学びました。病院は救急患者や家族の様子も伺われ、人の生を思わされました。

退院して約1ヶ月間の自宅療養の後、ようやく普通の生活に戻りました。病いとの戦いは、連敗からの勝利でした。

心を静めるスポーツ

角田 直

昨年の夏、6年ぶりに白馬岳に登ってきた。と、2017年9月号の『栄光』原稿と似たようなことを書くかと思って書き始めてみたものの、今年は特に山に登る予定もなく、ちよつと違うな、と。最近では地上波放送では見られないこともある日本代表サッカーのことを書いてみようかと思ったものの、ここ5、6年サッカーボールも蹴ってもいないし、昔話になっってしまうな、やめよう。今回は、ここ数年毎週のようにしているスポーツの話しよう。散歩である。毎週時間があれば、かつ、天気・気候に問題がなければ、散歩をしている。週末に数時間、リモートワークの合間に数十分、1駅手前で降りて1駅分歩くなど、特に長さや場所のこだわりもなにもなく、ただ単に歩く。ジョギングしている人に追い抜かれながら、たまに音楽を聴きながら、たまに公

園のベンチで休憩し、ただ歩く。人があまりいない住宅街なども歩いているので客観的にみると不審者の可能性も否定できない。

なぜ散歩するのか。そこに道があるから、でもあるが、リフレッシユのためである。始めたきっかけは、30分以上の運動が健康維持には必要と健康診断で言われたからではあったが、散歩している間に頭の中がリフレッシユできていくことに気づいて以降、とりあえず散歩が定着した。

散歩していると、忘れていたことをふと思い出したり、プレゼン用スライドのキーマンセージを思いついたり、何も考えていないからであるのか、頭の中の引き出しが整理されていく感じがとても心地よい。そう、この原稿もほとんどは散歩中に出来上がっている。オリンピックやワールドカップなど、見ていて声がつい出たり、立ち上がったたりしてしまうような心が熱くなるスポーツも楽しい。その一方で、散歩のように心を静めるスポーツも悪くないと思うのは歳を取ったからだろうか。

謙虚であること

永田慶典

「あなたは悪に過ぎてはならない。賢くありすぎてはならない。どうして自ら減じてよかるう」(コヘレトの言葉7・16)。

50歳を過ぎたある日、会社の机に健康診断の結果が届きました。中性脂肪、コレステロール、尿酸値…、軒並み悪く、素人が見ても成人病へまっしぐらの数値が並んでいます。就職して以来の運動不足が祟ったのでしょうか。そこで、少しでも歩こうと思い立ち、会社からの帰り道に途中下車し、4km程を歩くようにしました。数年続けるうちに数値が徐々に下がりはじめ、今では全てが基準値内に納まるようになりました。

そこで、医者の方針を押し切つて、昨年10月からジョギングを始めました。お年寄りに抜かされてしまう程度のスピードで走ってみました。汗をかく気持ち良さ、どこまでも走れそうな気になる瞬

間、就職して30数年の間に感じたことのない快感を経験しました。「もつと速く」「もつと長く」と、日に日に負荷を大きくしていきました。ところが、医師が言っていた通り、腰や股関節が痛み始めてしまいました。30年超のブランクは、簡単には埋められません。

医師の忠告を無視し、「まだまだ衰えていない筈」と自らの体力を過信したのは、コヘレトが言う「賢くありすぎ」たのだと反省しています。情けない話ですが、今は散歩に戻りました。やり過ぎは良くないですね。

振り返ると仕事においても、自分の意見を通す高慢さ、自分の経験を過大評価した過信、「やり過ぎ」もあったかもしれません。主の前に謙虚であることを忘れていたように感じます。主の導きに聞かず、自分の価値観で全てを判断していた気もします。

足腰が痛む中、聖書の中に冒頭の言葉をを見つけ、少しだけ神様に立ち返ることができました。股関節のストレッチをしながら、「数千年前の人も、同じだったんだなあ」などと思っています。

「好きなこと」とのつき合い方

原由佳理

我が家の正月二日、三日は箱根駅伝のテレビ観戦で始まる。スタートと同時に、一名が教会学校繋がり的好友の士とSNSで情報交換を開始。中継を流し見しながら雑煮の餅を焼き、おせちを取り分ける。穏やかな正月の食卓から極寒の箱根路をひた走る姿を見るのは少々後ろめたいが、力走の陰にある練習や努力の積み重ねを思い、どの選手にも気持ちが入る。

駅伝だけでなく、大抵のスポーツを見て楽しいと感じる。でも筋肉入りのオリンピックファンである家族とは違い、録画して見返すほどではない。また、残念ながら運動系タレントは授かっておらず、何とか人並みなのは泳ぎのみ。極めて大雑把だが、人が愛好する対象は、スポーツのほか麻雀等のゲームや、模型や手芸等の制作音楽演奏といった実践的なものと、それ以外に分けられる。後者では映画鑑賞や読書が代表的だが、最近は好みの物や人の応援、いわゆる「推し活」に打ち込む人も多い。

コロナ禍の外出制限などを契機としたその広がり、昨年『信徒の友』10月号の特集にもなった。ちなみにこの特集では沢田長老が企画・制作に携わった「イエス・キリストの系図手ぬぐい」も「イエス推し」の例として紹介されている。インドア派の私も、この10年ほど、ささやかな「推し活」で、新幹線での福島日帰りや夜行バス利用の広島遠征を行ってきた。

パウロは「賞を受けられるように走りなさい」と、福音を受けるにふさわしい者となるための節制を説く。それは確かにそうなのだけれど、今の世は情報や多様な価値観の洪水の中で、常に意思決定を迫られているようで、走り続けるのはいささかしんどい。ペしゃんこになった時、好きなものに触れて「あー楽しい」と自分を取り戻して「また頑張るか」というペースが私には合っているかと思う。実践系にせよ、「推し活」にせよ、自分らしさを確かめる度合いを越え、逆に飲み込まれてはいけない。視野を狭め、本筋を見失うのではなく、給水を取るようにリフレッシュしつつ天の国を目指したい。

追悼

洋子おばさんのこと

故・高橋洋子姉

小学生の時に初めてお会いした時から、ずっと「たけひとさん」と呼んでくださいました。子どもながらに、「さん付け」で呼ばれているだけでなく、ちゃんと大人として扱われている気がして、とても面映ゆく、どきまぎしていました。けれど、そうすることは洋子さんには当たり前のご様子でした。「何か素敵な方だなあ」と、それが第一印象。昨日のご様子ですが、それがもう五十年も前のことになりました。

家族ぐるみで交流させていたただいていたこともあり、名を呼んだ後は、いつも優しく微笑みながら、朗らかな良く通る声で、「まあ、お元気でしたか?」「どちらにいらっしゃるの?」「どうなされていましたか?」「ご両親様はお元気ですか? お兄様は?」とセツ

トで質問を投げかけていらつしやるのがいつものことでした。

私が言うのはおこがましいですが、洋子さんはとても純粋な方でした。いつだって子どもとか大人とか関係なく、誰に対しても同じ一人の人間として接しておられました。教会との交わりを始めた後は、それまでの対応に神様の御言葉を伝えるということが加わって、熱心にその働きをなさっておられました。地域集会を始められ、熱心に活動をされていました。とても行動的な面も持ちました。相手がどのような方でも何の偏見もなく、人は多様であることをごく当たり前に受け入れ、対応していらつしやいました。そんな洋子さんですが、御言葉について、ご夫君の玄さんと熱い討論?をなさる時もあり、いつもとは対照的なその姿に、意外な面も持ちだと驚いたこともありました。いまは天に召されて、玄さんとご子息の豊さん、敬さんとゆつくり話をされているのでしょうか。神様の御許で安らかであることを祈ります。(真下健人)

説教

『出会う』

サムエル記上3章1節〜10節
ヨハネによる福音書1章43節〜51節

伊勢原教会牧師 新井美穂

ヨハネ福音書1章39節以下には、「出会う」という言葉が3回出てきます。この「出会う」というギリシア語には、「見つける」「特に努力して探した末に見出す」という意味があります。

た一人ひとりです。まさにヨハネ15章16節「あなたがたが私を選んでのではない。私があなたがたを選んだ」です。

これをカトリックのフランシスコ会訳は「見つけられた」、永井直治先生翻訳の新契約聖書は「見出し」と訳しています。故に、43節は、主イエスは、フィリポをやつと探し当てたと読めます。

主イエスがこの二人を見出したのは、二人が特別に優れていたからではありません。主イエスは、二人の信仰や人間としての欠点や限界をご存知の上で、二人を見出されました。主イエスは、ナタナエルの未熟をダメだとはおっしゃらない。むしろ、主イエスの不思議な力に触れたから信じる、そんなちっぽけなことではなく、もっと大きなことをみる(51節)と約束してくださいました。

主イエスとフィリポやナタナエルとの出会いは、偶然ではなく、フィリポやナタナエルが主イエスを見つけたのでもなくて、主イエスがフィリポやナタナエルを探し当てる、見出す、そういう出会いです。

私たちが願う前から、主イエスが私たちに会わなければと必死になつて探し出してくださり、私たちは主イエスによって見出され

夢の話がベースです。ヤコブにとって天と地を繋いだ階段は、今やキリストなのです。天と地はキリストによって出会うのです。即ち、神様が、罪にまみれた人間に、

キリストにおいて出会ってくださいという約束です。詩篇85編11節「慈しみとまことは出会い／正義と平和は口づけし」(新共同訳)を思い出します。もっと大きなこと、それは、神様の慈しみが、罪深い人間からまこと(信仰)を引き出してくださる。神様の正義と、人間が作り出す平和がキリストを介して一つになる。神様によって明らかにされた正義の内実が、人間によって実現し、神様のくださる恵みを一部の人が独り占めせず、みんなに等しく分かち合われることが実現することではないでしょうか。

今世界を見たら、全然そうなつてない。自分の救いだけではなくて、この世、私たちを取り巻く全ての被造世界が救われることこそがもっと大きなこととしてこの世界に立ち現れなくてはいけないのに、神様の正義がキリストによって世界に広がるのを、私たちの無知と無関心が阻んでいます。自分の正当性の主張によって憤りたくなるような出来事の連続を前に、自分だけが安全であること、衣食

住が足りていることを申し訳なく思う、生きてること自体が罪深く感じてしまうような毎日です。そんな日々の中で無力感に囚われる己に一つの言葉が響きます。

「あなたがたは、地の塩である」と。この言葉を学んだ小学校3年生のお子さんが発見したものをお伝えします。「塩は小さいけれど輝く。僕たちも小さいけれどイエス様は教えてくれている」塩は主役じゃないけれど、料理を引き立てるように、僕たちもイエス様を引き立てる。「お鍋の中のお料理が、ひとつまみのお塩その味が変わるように、僕たちは小さいけれど、世界を変える力がある。イエス様の僕たちへの励まし」。私たちは、キリストが見出し、命がけで愛されている地の塩、世界を変える力を与えられた一人ひとりです。キリストの愛を実感できず、もがく日もあります。だからこそ、怒りを祈りに変え、感謝できない日にも、感謝し続ける。この単純さを、命も人権も蹂躪されていること甚だしい日々の中で、キリストに捧げ続けていきたいと思えます。

説 教

『主にある兄弟姉妹』

コヘレト4章9節～12節

ローマの信徒への手紙16章1節～16節

岸 俊彦

ロマ書16・1～16には、26人の名前が次々と挙げられています。

3回の伝道旅行でパウロが知り合ったキリスト者たちです。その中には、共に開拓伝道に励んだプリスカとアキラがいます。パウロが洗礼を受けたエパイネトがいます。一緒に囚人となったアンドロニコとユニアがいます。

最初に名前を挙げられたのはケンクレアイ教会のフェベです。ケンクレアイはコリント東側にある港町です。第2回目の伝道旅行でパウロはプリスカとアキラと共にコリント教会を開拓しました。今度はその信徒たちがケンクレアイで伝道し、家の教会が誕生しました。フェベはケンクレアイ教会の指導者の一人でした。

パウロの直弟子であるテモテやテトスには他の使命があり、フェベがロマ書を携えて、ローマ教会を訪問することになりました。礼

拝で手紙が読まれれば、信徒たちから色々な質問や意見が出てくるでしょう。フェベはローマにしばらく滞在して、信徒たちの質問や意見に答え、ロマ書の主旨について補足説明することが期待されました。

そのためにはローマ教会の信徒たちが、まずフェベをキリスト者として信頼に足る人物として受け入れてもらわなければなりません(16・2)。彼女のローマ滞在中に宿泊する場所や食事の提供などが必要で、彼女のためにパウロは、具体的な配慮を求めました。

フェベは、ケンクレアイ教会でパウロや伝道者たちに宿や食料を提供し、伝道を助けました。パウロからすれば、フェベがローマ教会から歓待を受けるのに相応しい使者でした(16・2)。

彼女を推薦後、最も親しい「プリスカとアキラによるしく」

(16・3)と挨拶が始まります。

二人は黒海沿岸のポントス出身のユダヤ人です。紀元49年、ローマ皇帝クラウディウスがユダヤ人をローマから追放したため、二人はコリントに移住しました。第2回目の伝道旅行の途上にあつたパウロはコリントで二人と出会います。二人とパウロはテント造りの同業者でした。パウロは彼らの家に寄宿して、生活と仕事を共にしながら伝道に励み、コリント教会を開拓しました。その後、2回目の伝道旅行の終わり、パウロは、二人と共にエフェソに下ります。そこで二人は家の教会を開拓しました(使徒18章)。

エフェソでパウロは官憲に捕らえられ処刑寸前になりました。しかし、「命懸けで私を守ってくれたこの二人」(16・4)のおかげで救出されました。

この教会でパウロから洗礼を授けられたのがギリシヤ人エパイネトです。彼はアジア州の初穂です(16・5)。

54年、皇帝クラウディウスが暗殺されると、プリスカとアキラは再びローマに戻ります。二人は

ローマで家の教会の主宰者となります。エパイネトもローマに移住します。ローマの家の教会を拠点に、プリスカとアキラ、エパイネト、主にある兄弟姉妹が礼拝し、祈り、伝道しました。異邦人もユダヤ人も主にあつて一つ、主にある兄弟姉妹です。教会は神の家族です(ガラテヤ3・26～28)。

パウロの伝道旅行は主にある兄弟姉妹の交わりによって支えられました。「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對する愛を示されました」(ロマ5・8)。この神の愛が主にある兄弟姉妹の交わりを生み出しました。主の愛を分かち合うために伝道し、地中海世界に主にある兄弟姉妹のネットワークが広がり、深まりました。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサムリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる」(使徒1・8)。

復活のキリストの使命は、主の愛に支えられ、主にある兄弟姉妹の祈りに覚えられ、実現します。

二十歳の祝福式

神に奉仕する生き方

風間 洸

この度は、20歳の祝福式を執り行っていたいただき、ありがとうございます。数々の祝福、励ましのお言葉をいただき、成人を迎えたことへの自覚と責任がより一層確かなものとなりました。

成人を迎えてもなお、自分自身が未熟で不完全な人間であることを覚える日々です。悩みや挑戦から顔を背け、自己の欲を優先する自分の姿に落胆するとともに、変わりたいと思っています。特に、今年度は教会生活において大きな変化を迎えました。

今年度からヘルパーとして教会学校に参加することとなり、子どもたちをはじめとして、教師や教員の方々と交流する機会が増えました。この変化は、教会生活の中で1人のクリスチャンとしての視野を広げ、神様に奉仕するための導きであると気付かされました。

幼少期から教会に通うことが当たり前前で、それは逆に大きな意味

を持つものではなく、義務を果たす延長線上のような信仰生活を送っていました。しかし、教会学校に携わる中で、若者への伝道の重要性を学び、それにかける教師たちのパッションを感じることで、私に与えられた賜物を活かすべきところが教会であると、確信しました。幼少期から教会に通い、神様の御言葉を学び、人生の基盤を構築できたことは、これから生きる子どもたちの人生の基盤づくりを手助けできる材料だと思っています。

神様によって造られた教会、与えられた子どもたちのために奉仕することは、ひいては神様のために奉仕することです。そのような利他的な生き方を、全うしていきたいと思えます。

長老のファイル

能登半島地震から始まったこの年、未だ年初とは信じられないほどに、皆さま色々なことを憂い、備え、考え、気を張ってお過ごしのことと思います。被災地の皆さま、被災教会の皆さまの上に、主の御導きを祈ります。当教会も被災地の中部教区のことを覚え、教団を通して献金をいたします。

コロナ、インフルエンザをはじめ、感染症に悩まされる厳冬ですが、召天者記念礼拝より礼拝堂の座席規制が解除され、コロナ以前と同様に、自由に着席することが可能になりました。自然と秩序ある間隔を保って着席される皆さまの姿が印象的です。

クリスマス礼拝からは、交読詩編が「聖書協会共同訳版」へと変更になりました。昨年我々は聖書の変更も経験しましたが、聖書の時と同様、きつとすぐに新交読詩編にも慣れ親しむことができるでしょう。新しい交読詩編は黒の単色刷りとなっており、これまでの黒字と赤字で交読していたものよ

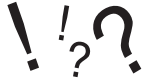
り見にくい、というお声も耳にします。てっきり経費削減の観点から単色刷りに変更したのだろうと私は思っておりましたが、色覚に問題がある方も読みやすいという観点からの黒単色への変更とうかがい、納得しました。

来たるべき新年度は岸牧師の最後の年度となります。当教会に神様が松谷祐二先生をお導きくださり、教員と先生のいわゆる「お見合い説教」も感謝のうちに終わりました。この『栄光』発行日には、松谷先生をお迎えするかどうか、臨時教会総会で決まることでしょう。

招聘の決定後は、牧師館の改修工事をはじめ、大きく教会が動き、教会総会で決定整理していかねばならない物事も出てきます。本日まででなく、今後も臨時教会総会が行われていきますが、総会定足数を満たして良き決定の場を持てますように、皆さまの積極的な総会出席をお願いいたします。

(石室裕一)

個人消息



掲示板



- レントに入る 2月14日(水)
- 棕櫚の主日 3月24日(日)
- 受難週祈祷会 3月27日(水)
午前10:30 午後7:00
- もより教会合同受難週礼拝
3月28日(木) 午後7:00 経堂緑岡教会
- 受難日祈祷会 3月29日(金) 午後1:00
- イースター 3月31日(日)

編集後記



▽能登半島地震から1ヶ月が経ちましたが、ライフラインの復旧は厳しい状況が続いています。被災された方々が1日も早く平穏な生活に戻れることを切に祈ります。(酒井)

「栄 光」2024年2月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

牧師の書齋から



西南支区新年礼拝に出席しました。10年以上出席したことがありませんでした。元日出かけるのはしんどかったからです。今回は、来年3月末教会を辞任するため「最後でしょう」と言われて、説教を引き受けました。大晦日の礼拝は久保哲哉先生にお願いしていましたから問題ないだろうと思いましたが、やはりその後体調を崩しました。教会以外のことを引き

受けると調子がくるう年齢となったことを改めて感じました。

霊南坂教会で説教するのは3回目です。葬儀でお借りしたときと、西南支区長として按手礼を司式したとき、そして今回です。大きな立派な会堂で、高い講壇から会堂の隅々まで見渡すことができず。音響も整っており、とても説教しやすい礼拝堂です。原稿を見ながら説教するため、書見台の角度と高さが気になります。経堂北の講壇は、自分にとっては正直言って原稿が見にくい。それに比

べて霊南坂は実に見やすい。

「真理は自由を得させる」と題して使徒言行録の終わり、パウロのローマでの伝道について説教しました。軟禁状態のパウロが「全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」(使徒28・31)ことに倣って、私たちも恐れることなくキリストの福音を宣べ伝えようと語りました。マイクがあるのに、広い礼拝堂につられて声がついつい大きくなり、疲れました。礼拝後、元教会員夫妻、親子と

挨拶できたのは嬉しいことでした。お互い年をとったことや、大学生となったCSの生徒の成長は、懐かしさとともに、主の恵みに感謝するひと時となりました。180人の出席だったそうです。4年振りに聖餐を分かちあい、礼拝後お茶の会もあり、徐々に支区の交わりも回復していくのでしょう。霊南坂教会の皆さんは連日のご奉仕で大変だったことでしょう。感謝のほかありません。帰りの車中、緊急地震速報には驚かされました。(岸 俊彦)